

長崎医科大学薬学専門部はよみがえる 2 : 坂本キャンパス移転・回帰にあたり

長薬同窓会副会長・長崎大学薬学部教授 川上 茂 (平7)

長崎大学薬学部は2028年4月から医学部のある坂本キャンパスに段階的に移転をする。坂本キャンパスは長崎大学薬学部の前身である長崎医科大学附属薬学専門部があった場所であり、1945年(昭和20年)8月9日11時2分に原爆被災により校舎が破壊された為、佐賀市の多布施校舎、諫早市の小野島校舎、長崎市の片淵校舎(経済学部別館借用校舎)、昭和町校舎、文教町校舎へと移転をしてきた。医学部や歯学部のある坂本地区への移転は、医学歯学薬学の共修や共同研究の推進などの医療の進歩に対応した教育・研究の発展を目指していくためのものであるが、歴史的な経緯からは原子爆弾により被災した長崎医科大学附属薬学専門部の地への帰還とも考えることができる。長薬同窓会では役員を中心として、毎年8月の第1週目の日曜日にグビロが丘に建設されている薬専防空壕跡地慰霊碑の周辺の清掃活動を行い、犠牲になった教職員や先輩方の冥福を祈り続けている。しかし、長崎医科大学附属薬学専門部の校舎の詳細な場所については文教町校舎に通学していた現在の世代の同窓会役員も分からない状況となっている。今回、坂本キャンパスへの移転が決まったことから、長崎医科大学薬学専門部の校舎の場所について調査を行った。

まず、長崎大学薬学部百年史への記載の確認を行った125ページには校舎の変遷の詳細が記載されている。第五高等学校医学部時代1894年(明治27年)～1900年(明治33年)に至る間に『浦上里郷の浦陵ヶ丘(現長崎大学医学部基礎教室)に校舎が新設され』とあり、現在の医学部基礎棟の近くに校舎があったことが確認できた。126ページには長崎医学専門学校薬学科校舎見取図があり、300坪ほどの狭い木造平屋であったと記載されている。図1には長崎医学専門学校薬学科校舎見取図を示す。右端には北寮、中寮、南寮、生徒食堂、生徒集会所の記載がある。また、『裏手には佐古旧校から移した薬祖神(小彦名命)の石の祠に池を配した庭園式の風流な薬草園があった。石燈籠の台石には文久の年号と共に長与専齊他十数名の人名が刻まれて居た。当時の学生一同の献燈である。(この祠は後に専門部の前庭に移し毎年新春に祭典する慣例があったが原爆でなくなった。)]』とある。なお、文久は江戸時代の1861年から1864年までの元号であり、分析窮理所建設1865年(慶応1年)より前の時代となり薬学部の起源より前の時代の年号が刻まれていたものが薬学科校舎の薬草園にある石燈籠の台石に刻まれていたことは当時の先輩方が本学の起源をどのように認識していたかという観点でも興味深い記述である。さらにすすめると127ページには『大正11年(1922年)から薬草園裏の芋畑が整地され木造2階建約700坪の新校舎が竣工したのが翌12年(1923年)3月で、4月から此所で附属薬学専門部が発足した。』とある。図2に長崎医科大学附属薬学専門部校舎見取図を示す。図1の北西端であるF(薬草園)の場所に新校舎が竣工したことを確認することができる。図2の一番下側の建物は2階部分となり、最北側部分にG薬草園があった。そして、『この様にして50年以上を費やして整備されて来た校舎も設備も蔵書も昭和20年(1945年)8月9日11時2分原爆の一閃により医科大学共々に一瞬にして焼土の廢墟と化して潰滅し去った。』とあり、この地で被爆を受けたことが確認できた。

それでは、図2の長崎医科大学附属薬学専門部校舎はどこにあったのだろうか?これについては、長崎大学薬学部百年史に記載がなかった。そこでインターネットでの調査を行ったところ、長崎大学原爆後障害医療研究所 資料収集保存・解析部の医科大学と附属病院の被害状況の地図で詳細な位置を確認することができた。長崎医科大学の被害状況を図3に示す。この図の上部をみると、薬学専門部は右上(北東側)に位置していたことが分る。また、射的場がその下(南側)にある。長薬同窓会長であった故市川正孝先生の当時

の同窓会長挨拶に、『グビロが丘の裏側の斜面に雑木が繁茂した場所があり、旧薬専校舎地域の射的場跡に防空壕が採穴された』、『原爆五十周年記念誌及び薬学百周年記念誌からは、爆撃に備えて、主として薬専の教職員及び学生によって防空壕が掘られる途中に原爆を受け、大部分の方々が犠牲になったと記載されています。』との記録があり、この場所が現在のグビロが丘の慰霊碑のある場所と一致することも確認された。現在の長崎大学医学部のマップ（図4）、最近発掘された生化学教室跡地の上空からの写真（図5）と図3を照らし合わせて考察する。上空写真をみると旧生化学教室の右側（北側）のラインは図4の5番の福利厚生施設（生協）の建物の右側（北側）のラインと一致していることが分かる。図3に示されている当時の長崎医科大学附属薬学専門部の校舎はこれらの上側のラインより右上側にあり、現在のマップである図4の5番の福利厚生施設（生協）の建物の右側（北側）のラインの右側（北東側）にあるため、現在のマップである図4でみると「長崎医科大学附属薬学専門部校舎」（図2）は「18番の熱帯医学研究所の北側部分の建物とところから20番のグローバルヘルス研究棟」にかけて建っていたものと推察される。また、相対的な位置関係から図3の射的場の場所と現在の慰霊碑の場所もほぼ一致していることから確認できた。一方で、それよりも前の時代の「長崎医学専門学校薬学科校舎」（図1）は5番の福利厚生施設（生協）やモニュメント辺りの場所にかけて建っていたものと推察される。

原爆の被害にあったのは、長崎大学薬学部百年史77-78ページによると杉浦教授、山下教授、それに在校中の三年生は防空壕作業中に24名、工場への学徒動員には行かずに残留していた二年生9名、図書整理中の一年生5名と事務関係者6名の計46名である。この当時の学生の状況については、当時の薬学専門部部長であった江口虎三郎教授が「追憶」長崎医科大学原子爆弾犠牲者の霊に捧ぐ」より転載された文章が記載されている（長崎大学薬学部百年史83-93ページ）。『生徒は一年生が長崎鮑の浦の三菱電機製作所に動員。二年生は熊本葦北郡水俣にある日窒工場に動員しておりました。三年生は福岡県築上郡吉富町にある武田製薬の吉富工場と、山口県小野田市にある田辺製薬の小野田工場に半数宛二班に分かれて動員しておりましたが、卒業期が九月でありましたため七月末工場を引き上げて帰校し、卒業迄残る数十日を学業の整理に専心して居りました。私は此の三学年のことを思うと胸が詰まる。在校二年有半、それも苛烈な戦争の最中の事として学業に専念する事も出来ず、工場に動員して工具にもおとらぬ労苦を嘗めなければなりません。それでも卒業をほんの間近に控え、楽しい学び舎に帰ってノートの整理等にいそしむ諸君は過ぎ来し労苦も楽しい思い出ではなからうか。譬え短かかった学生々活とは云え卒業後の夢も胸中去来するものがあつたらうに、十数日の後生命の危厄に逢わなければならぬ事を諸君の誰が想像し得たであろう。私は涙が止め度もなく流れる。』と記されている。この文章を読み、当時の状況を想像すると私も胸が苦しくなる。ここに当時の状況の記録を再掲し、原子爆弾犠牲者の御冥福を祈る。

本原稿を書きながらふと長崎大学薬学部の校歌（図6）を思い出した。長崎大学薬学部百年史を見たが、この校歌がいつできたのかが分からない。しかし、2番に坂本キャンパスがある医学部基礎棟付近を指す「浦陵ヶ丘」の記載があることから、長崎医科大学薬学専門部時代以前に作られた、あるいは、戦後に作られたとすれば長崎医科大学薬学専門部時代を懐かしんで作られているものであると推察される。作詞家の八波先生の生没年を調べると、1875年（明治9年）3月に生まれて1953年（昭和28年）12月に亡くなられたとあり、校歌が戦前・戦後の作かは区別できなかつた。「泰西」とは西洋を指し、近代薬学発祥の本学校歌に相応しい始まりである。「瓊の浦和」のうち瓊の浦とは、『長崎の古い呼名で、「瓊」は美しい玉（宝石）という意で、「美しい玉（宝石）のように光り輝く海、港」という意味』であると長崎市HPの説明にある。これに和を入れているところにオリジナリティを感じる。「稲佐ヶ丘」は稲佐山公園や展望台を指すのであろうと推察したが、稲佐山は明治32年から終戦まで陸軍省の要塞地帯であり、立ち入ることが難しかったとい

う。1958年(昭和34年)にテレビ塔が建ってから現在のような形で整備されるようになったという。「稲佐ヶ丘」とは中腹辺りからの長崎湾の夕陽の眺めであったのだろうか。当たり前ではあるが、当時の先輩方も我々と同じ風景をみていたのだということが良く分かる。

最後にあたり、本稿のタイトルを「長崎医科大学薬学専門部はよみがえる2：坂本キャンパス移転・回帰にあたり」とした。これは、故市川先生が遺された平成11年の「同窓会長挨拶 原爆五十周年記念事業—長崎医科大学薬学専門部はよみがえる」によって慰霊碑の経緯を知り、長崎医科大学薬学専門部のあった場所を調べたいと考えたからである。長薬同窓会では毎年慰霊碑周辺の清掃活動を8月に行っている。学生は前期試験期間中に当たるので同じ日でなくとも良いが、坂本キャンパス移転を契機として、忘れてはいけない記憶である長崎医科大学薬学専門部の原爆被害の状況の説明と慰霊碑への学生の参拝の機会を併せて設けたいと願っている。長崎医科大学附属薬学専門部は、原子爆弾による甚大な被害を受けた世界で唯一の薬学部であり、社会的に果たさないといけない使命は大きい。今後、もし、失われた薬祖神(小彦名命)の石の祠や文久の年号と共に長与専齊他十数名の人名が刻まれている台石が発見されれば我が国の薬学における歴史的な発見である。ここ数年、難病治療が可能となる新規モダリティに関する国内外での熾烈な開発競争が進められており、それに対応できる創薬人材の育成が急務である。薬剤師法第1条にある薬剤師がつかさどる、薬剤師の任務である調剤、医薬品の供給、その他薬事衛生の各要素のうち、特に、薬科学科生との共通部分であり、薬学部全体の目標である、医薬品の供給における最新の創薬研究、開発、治験、審査等を世界レベルで推進できる博士研究者の育成が求められる。一方、全国的にも6年制薬学科の博士進学率は低く、薬科学科博士後期課程も併せて、薬学の発展に貢献する高い研究および教育能力を持つ薬学部教員の育成も急務である。今の薬学の状況は、校歌(図6)にある「我等立たずば蒼生如何に、重し 重し 我等が任務」にあたる状況であり、その使命の重さを痛感する。なお、蒼生は多くの人々や人民の意である。引用文は『 』で示したが、年号については読者にイメージしやすいように西暦を()で追記した。長崎大学薬学部が坂本キャンパスに回帰するにあたり、本稿を通じて薬学部の教員や同窓生が長崎医科大学附属薬学専門部の特異的な歴史を認識する一助となり、同地での原子爆弾犠牲者を悼んでその過去とも接点を持ちつつ、今後の薬学の発展に貢献する人材が育っていくことを願っている。

長崎医学専門学校薬学科校舎見取図

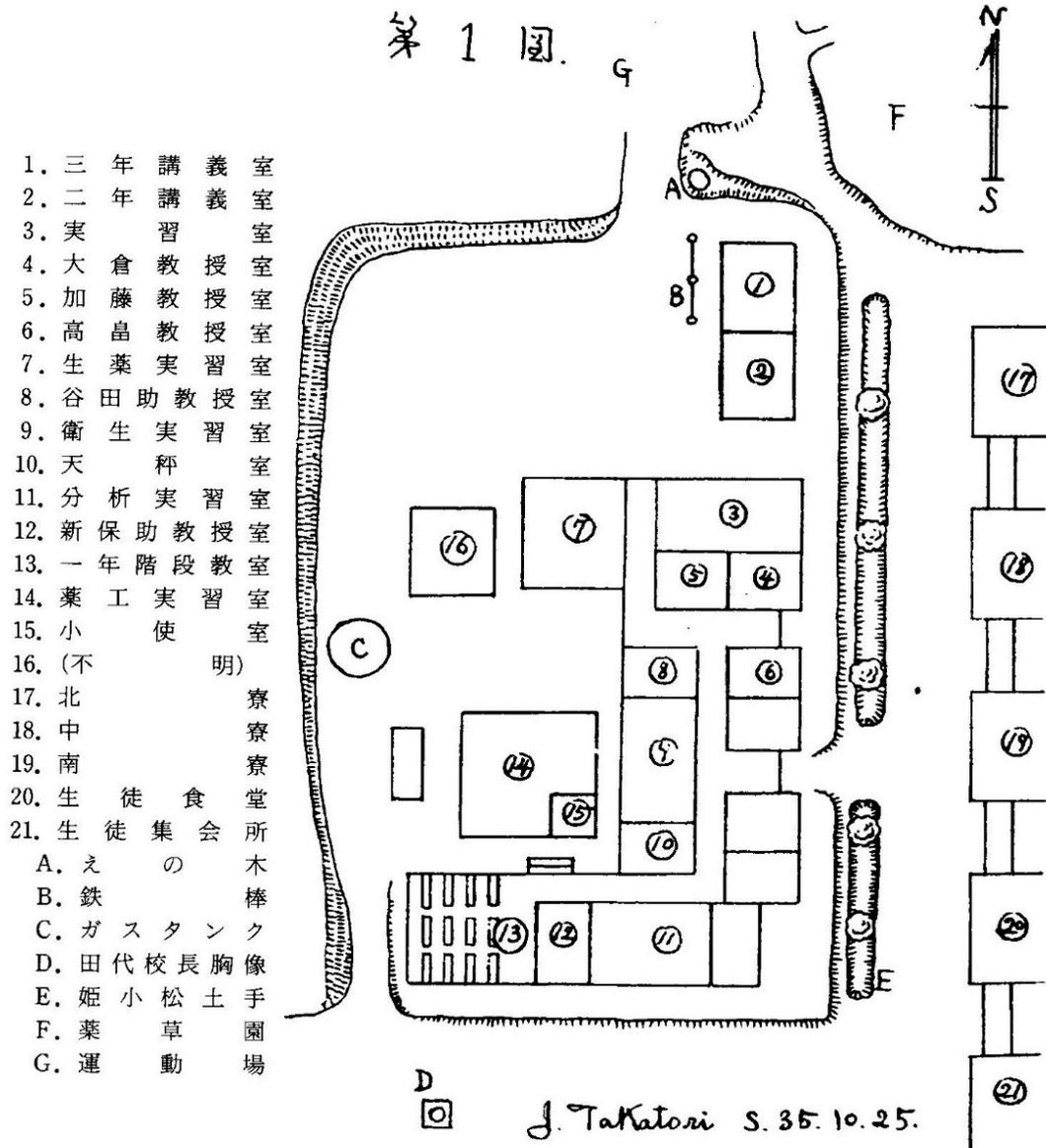


図1 長崎医学専門学校薬学科校舎見取図 (長崎大学薬学部百周年史から引用)。Fが薬草園であり、ここに長崎医科大学附属薬学専門部校舎が建築されることになる。

長崎医科大学附属薬学専門部校舍見取図

第2図

1. 薬化学実習室
 2. 衛生化学実習室
 3. 薬工実習室
 4. 分析学実習室
 5. 調剤学実習室
 6. 西教官共同研究室
 7. 生薬学実習室
 8. 東教官共同研究室
 9. 危険薬品庫
 10. 銃機庫
 11. 小使室
 12. 講堂(一年講義室)
 13. 二年講義室
 14. 三年講義室
 15. 図書
- A. せんだんの木
 B. 防火栓
 C. えの木
 D. 薬祖神
 E. 防火壁
 F. 車廻し
 G. 薬草園

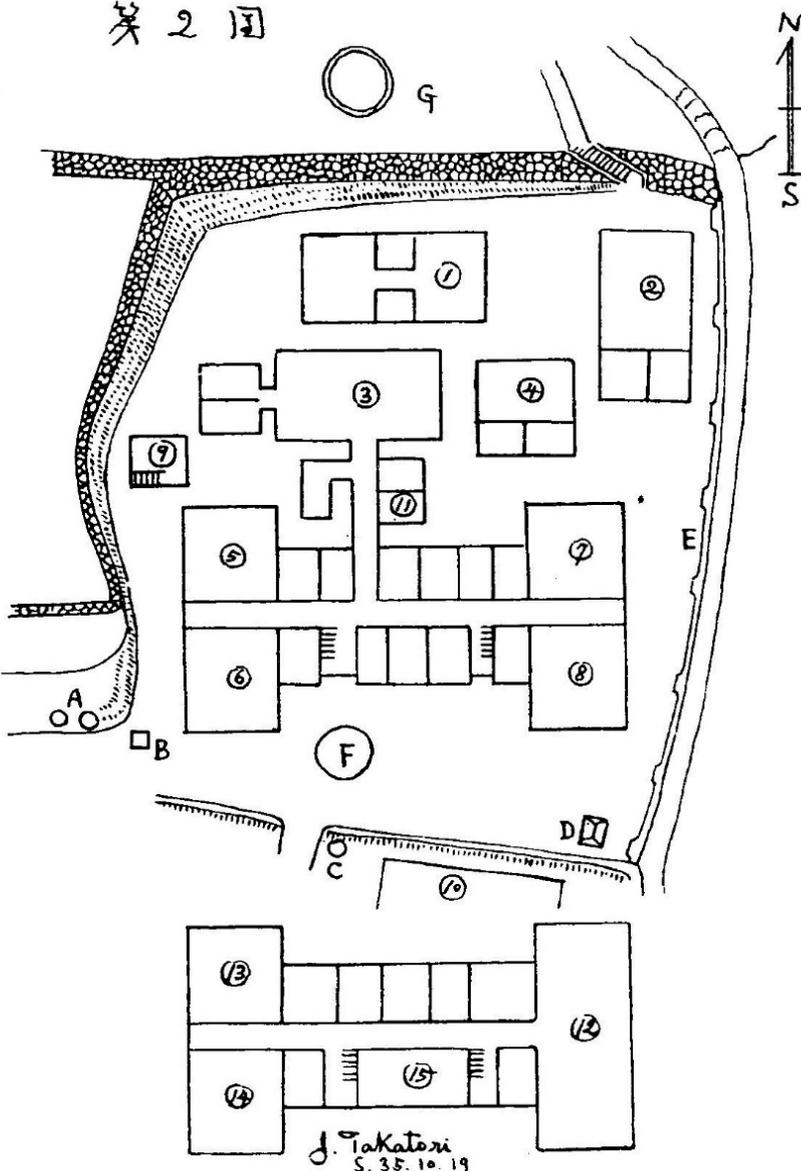


図2 長崎医科大学附属薬学専門部校舍見取図(長崎大学薬学部百周年史から引用)。全体は図1のFの薬草園の場所であるが、この最北側のGの部分が薬草園になっている。

長崎医科大学の被害状況

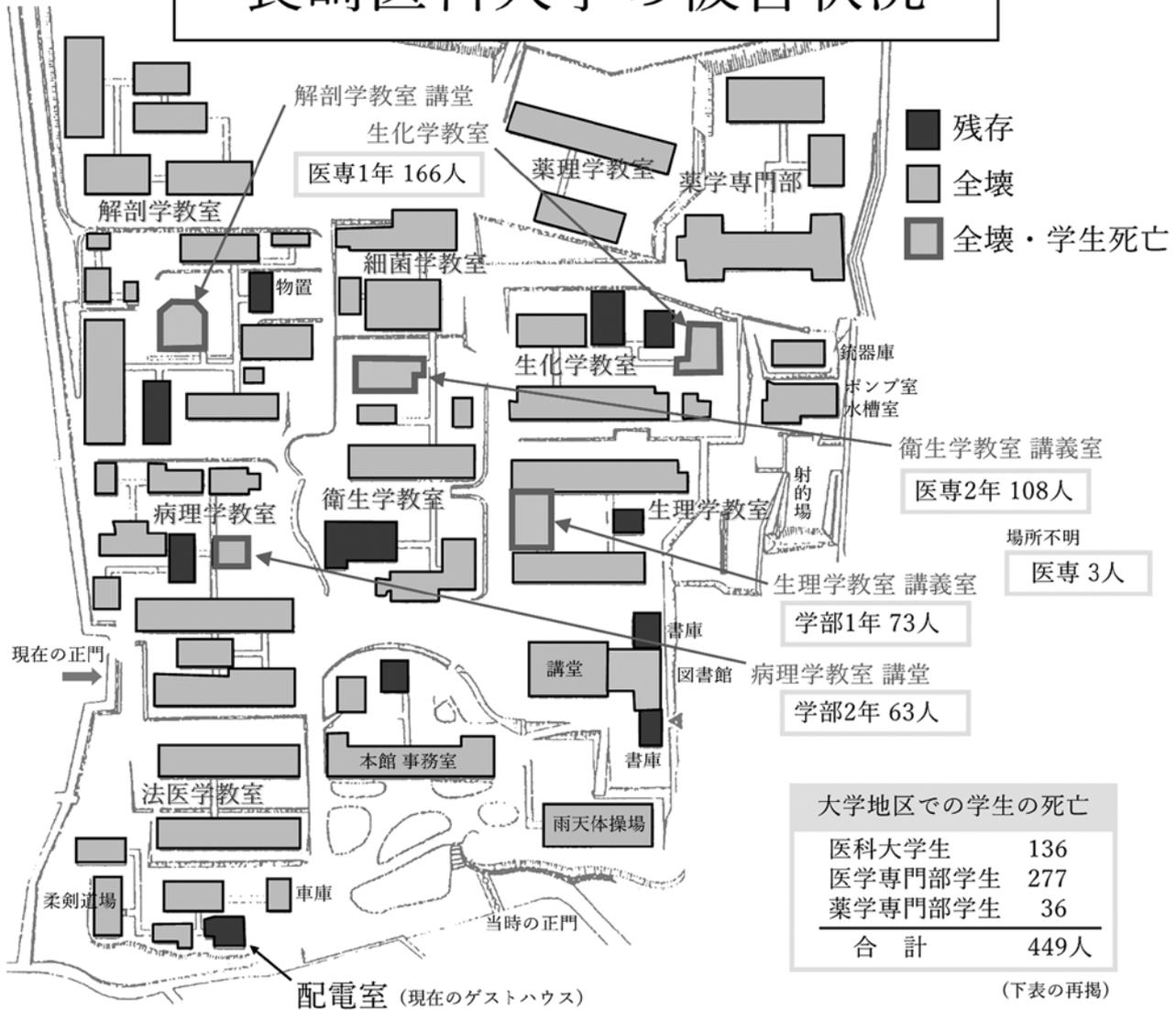


図3 長崎医科大学の被害状況 (長崎大学原爆後障害医療研究所提供)

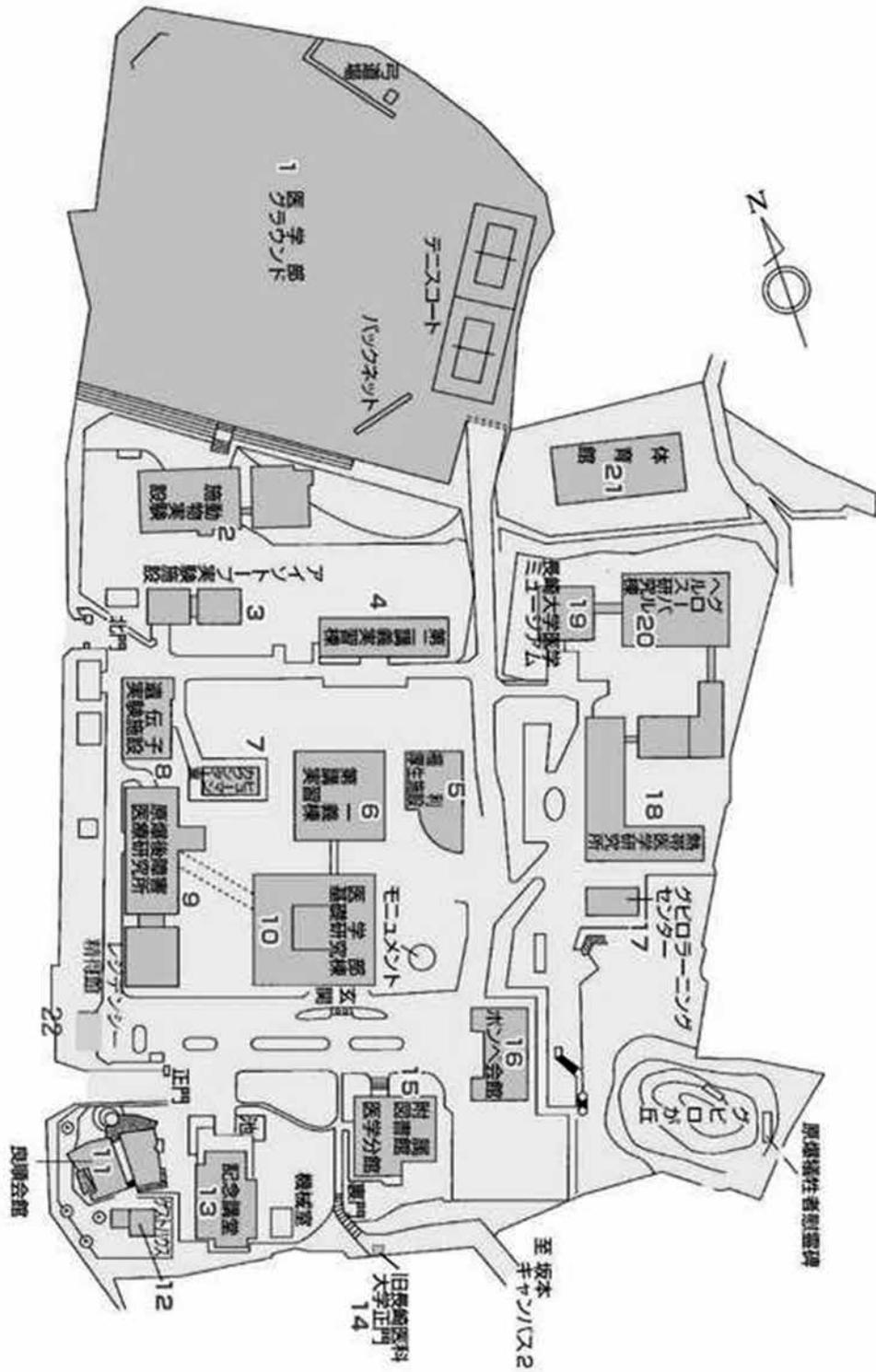


図4 現在の坂本キャンパスのマップ（長崎大学医学部ホームページから引用）。
図3に合わせて左90度回転している。



図5 旧長崎医科大学生化学教室跡地の写真（長崎大学より許可を得て掲載）。
 生化学教室跡地の北側に写る建物が福利厚生施設（生協）。写真右が北側。

長崎大学薬学部校歌

八波 則吉 作詞

一 泰西の学 風に伝えし
 文化の港 瓊の浦和に
 補生の薬学命と励む
 我等立たずば蒼生如何に
 重し 重し 我等が任務

二 塵環遠く 浦陵ヶ丘に
 緑樹環れる学園ここに
 知識の源 化学の泉
 汲みて世にしく仁慈の波を
 樂し 樂し 我等が理想

三 人壽つながらる 千古の秘奥
 閑かてやまじと四時に貫く
 柏景建現が燃えたつ意気を
 稲佐ヶ丘の夕陽赤し
 強し 強し 我等が自信

図6 長崎大学薬学部校歌